

授業研究

2018年度授業実践報告 「メディア情報とキャリア」と「論文執筆法」

塚本美恵子・村越一哲・斎賀和彦・
瀬戸純一・枇杷木陽一

【要旨】 メディア情報学部では、専任教員が持ち回りで複数開講する学部科目の授業がいくつかある。こうした授業の担当者は、とりまとめ教員を中心に授業内容を検討し、事前の打ち合わせをした上で授業に望んでいる。本稿は2018年度に実践したこうした授業のうち、2年次生必修科目の「メディア情報とキャリア」と、3年次生対象の「論文執筆法」についての授業実践報告である。「メディア情報とキャリア」で実施したキャリア教育・就職支援課との連携を深めた授業は、学生にも好評だった。また「論文執筆法」では、図書館職員の申し出で検索実習を授業に導入したことで学生の検索に関する知識とスキルが向上した。

【キーワード】 大学、メディア情報とキャリア、論文執筆法、授業実践

1. はじめに

高等教育機関である大学では、教員が専門性を活かした授業を行っている。しかし学部の基礎的な科目では、専任教員が持ち回りで学部の基礎となる授業を担当している。このような科目の一つに2年次生の必修科目「メディア情報とキャリア」と、3年次生を対象とした「論文執筆法」がある。2018年度の「メディア情報とキャリア」の授業では、キャリア教育・就職支援課との連携を強めた授業運営を行い受講生から好評を得た。また「論文執筆法」の授業では、図書館職員の申し出で3回の検索実習を授業に導入したことにより検索に関する学生の知識とスキルが向上した。本稿では、2018年度に実施した「メディア情報とキャリア」と「論文執筆法」の授業実践を記録し、そのノウハウを教員間で共有し、今後のさらなる授業改善へつなげるために授業実践報告を行う。

2. 「メディア情報とキャリア」

「メディア情報とキャリア」の講義は、3クラス同時開講している。ここでは、2.1. 「授業シラバスと位置づけ」、2.2. 「合同授業」、2.3. 「各教員とキャリアセンタースタッフの授業内容の紹介」の順に紹介する。

2.1. 授業シラバスと位置づけ

「メディア情報とキャリア」は、メディア情報学部の専攻科目群、専攻基幹科目の学部科目として位置づけられた2年生全員が履修する必修科目である。2018年度シラバスは表1に示した通り、授業のサブタイトルを「社会人としての〈ジェネリックスキル〉を身につける」とした講義科目である。講義内容は、メディア情報学部の特徴を生かした情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力、表現力、実行力の向上のための講義となっている。授業の到達目標は、「常に学び続ける力やコミュニケーション能力を獲得することを目指

表1. 「メディア情報とキャリア」2018 シラバス

サブタイトル	社会人としての〈ジェネリックスキル〉を身につける																														
講義内容	グローバル化が進む現代社会は「知識基盤社会」と言われています。大学を卒業し社会に出ると、複雑で答えの出しにくい課題に取り組み、自ら問題を発見し、解決していかなければなりません。こうした社会で力強く仕事をしていくためには、基礎となる力(ジェネリックスキル)を身につけることが大切です。この講義では、メディア情報学部の特徴を生かしながら、情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力、表現力、実行力の向上のための講義をおこないます。																														
到達目標	常に学び続ける力やコミュニケーション能力を獲得することを旨とします。現代を生きていくには、主体性を持ち、常に学び続け、成長し続ける力を身につけることが重要です。大学では勿論のこと、社会に出るとよりいっそう課題発見能力や問題解決能力が求められるようになります。こうしたジェネリックスキルを身につけ、自らの行動や感覚を意識し、プロセスをコントロールできるようになり、さまざまな環境に適應する力を養うことを目標にします。																														
到達目標となる 駿大社会人基礎 力	コミュニケーション能力、行動力・実行力																														
卒業認定・学位 授与方針との関 連	この科目はディプロマポリシー(全学)の「(1)基礎的な力」「(3)考える力」「(4)協働する力」と関係する。学部のディプロマポリシーでは、これらに加えて、キャリア活動にとって重要な「(5)総合的な力」を養う。																														
関連科目	メディアと情報資源、オンキャンパス・インターンシップ1、キャリア関連科目																														
テキスト・参考 書等	【参】問題解決のためのリテラシー教科書・講義編 河合塾PROG 開発プロジェクト編著																														
授業外における 学習方法及び必 要な時間	指定したテキストの章は熟読し、内容の把握をしておくこと(2.5時間)。毎回のワークショップでのワークシートの内容をもとにその日の復習を行うこと(2時間)。																														
成績評価方法	授業時に毎回実施する課題(40%)、グループワークの成果物(30%)、レポート(30%)																														
課題に対するフ ィードバック	毎回提出する「授業の振り返り」に対してコメントを返す。																														
授業計画	<table border="1"> <tr><td>第1回</td><td>現代人に求められる能力・ガイダンス</td></tr> <tr><td>第2回</td><td>基本となる言語能力と非言語能力</td></tr> <tr><td>第3回</td><td>情報収集力</td></tr> <tr><td>第4回</td><td>特別講演1</td></tr> <tr><td>第5回</td><td>情報分析力</td></tr> <tr><td>第6回</td><td>実践力とは</td></tr> <tr><td>第7回</td><td>課題発見力</td></tr> <tr><td>第8回</td><td>構想力</td></tr> <tr><td>第9回</td><td>特別講演2</td></tr> <tr><td>第10回</td><td>表現力、書く</td></tr> <tr><td>第11回</td><td>表現力、話す</td></tr> <tr><td>第12回</td><td>表現力、プレゼンテーション</td></tr> <tr><td>第13回</td><td>特別講演3</td></tr> <tr><td>第14回</td><td>実行力</td></tr> <tr><td>第15回</td><td>生涯学び続けるために・まとめ</td></tr> </table>	第1回	現代人に求められる能力・ガイダンス	第2回	基本となる言語能力と非言語能力	第3回	情報収集力	第4回	特別講演1	第5回	情報分析力	第6回	実践力とは	第7回	課題発見力	第8回	構想力	第9回	特別講演2	第10回	表現力、書く	第11回	表現力、話す	第12回	表現力、プレゼンテーション	第13回	特別講演3	第14回	実行力	第15回	生涯学び続けるために・まとめ
第1回	現代人に求められる能力・ガイダンス																														
第2回	基本となる言語能力と非言語能力																														
第3回	情報収集力																														
第4回	特別講演1																														
第5回	情報分析力																														
第6回	実践力とは																														
第7回	課題発見力																														
第8回	構想力																														
第9回	特別講演2																														
第10回	表現力、書く																														
第11回	表現力、話す																														
第12回	表現力、プレゼンテーション																														
第13回	特別講演3																														
第14回	実行力																														
第15回	生涯学び続けるために・まとめ																														
更新日付	2018/01/11 11:52																														

(出所) 駿河台大学メディア情報学部シラバス
https://www.surugadai.ac.jp/gakubu_in/media/

し、「現代を生きていくには主体性を持ち、常に学び続け、成長し続ける力を身につけることが重要です。大学では勿論のこと、社会に出るとよりいっそう課題発見能力や問題解決能力が求められるようになります。こうしたジェネリックスキルを身につけ、自らの行動や感覚を意識し、プロセスをコントロールできるようになり、さまざまな環境に適応する力を養うことを目標にします。」を掲げている。

到達目標となる駿大社会人基礎力は「コミュニケーション能力、行動力・実行力」であり、卒業認定・学位授与方針との関連としては「この科目はディプロマポリシー（全学）の『(1) 基礎的な力』『(3) 考える力』『(4) 協働する力』と関係する。学部のディプロマポリシーでは、これらに加えて、キャリア活動にとって重要な『(5) 総合的な力』を養う。」としている。関連科目として挙げられているのは、メディアと情報資源、オンキャンパス・インターンシップⅠ、キャリア関連科目で、テキスト・参考書は「問題解決のためのリテラシー強化書-大学で学びを豊かにする6つの力講義編」(河合塾PROG開発プロジェクト編者)を共通テキストとして使用している。

2.2. 合同授業

初回のガイダンスと最終回、それに特別講演などでは3クラス合同の授業を実施した。ここでは2018年度に実施した合同授業について述べる。

2.2.1. 「座談会」

1回目の合同授業は「座談会」とした。従来は「特別講演」として1名の講師にお願いしていたが、2018年度は基本的に学生が卒業後のロールモデルとしてイメージしやすい3名の卒業生にお願いして、受講生が疑問・質問などを登壇者に気楽に聞けるような座談会形式とした。ただ、どの分野の卒業生に声掛けするかはキャリア教育・就職支援課スタッフと検討を繰り返した。というのもメディア情報学部では「映像・音響メディア」「デ

ジタルデザイン」「図書館・アーカイブズ」の3分野があり、卒業生についても「マスコミ」「デザイナー・ディレクター」「クリエイター」「情報処理・資格」「図書館・司書」「博物館・アーカイブズ」と幅広く、どの領域で活躍する卒業生に依頼するか、またお願いできそうな卒業生の都合がつかないなども難しさもあったが、最終的に下記の方々にお願いした。

- ①新井 克明 氏 2002年 駿河台大学大学院 文化情報学研究科 修了、(株)PTS (セゾングループ⇒JTBグループ) から現在、(株)サンエイホーム専務取締役で駿河台大学同窓会 会長
- ②仲澤 萌 氏 2016年 メディア情報学部卒業、(株)セラク SI本部 WEBマーケティングコミュニケーション部 大手警備会社に常駐し、デザイナー/コーダーとして勤務
- ③田中 麗奈 氏 2017年メディア情報学部卒業、日企入社、「鉄腕DASH」でアシスタントディレクターを担当するなど活躍中

座談会の登壇者の案内は2週間前から受講者に告知し、前週には登壇者への質問を集め、座談会当日には登壇者に回答していただく形をとった。

当日、座談会に出席できるかどうかの日程も危ぶまれた田中氏も当日の「座談会」には無事出席していただき、司会は卒業生の新井氏にお願いした。教員からはなかなか聞き難い給与のことなども単刀直入に話題にさせていただいたこともあり、受講者にも大変好評だった。

学生の「振り返りシート」には、「卒業生が就活や給与のことを赤裸々に話してくださって、自分の今後の人生にとっても役にたったなと感じた」、「給料が生々しくて非常に参考になりました」、「私自身、大学へのコンプレックスがありましたが、とても恵まれた環境に居ることが分かりました」、「今日の講義で、駿大生だからという意識をなくそうとっていましたが、そういう考え方は今日からやめようと思いました。またこのような話をききたいです」などのコメントが多く寄せられた。

2.2.2. 「特別講演会」

2回目の特別講演は、3クラスに分かれて実施した。学生は希望の業界の講演会に参加し、詳細な話や質疑応答もできるような形式とした。各教室の登壇者は以下で司会進行は授業担当者が行なった。

- (1) 株式会社 黒澤フィルムスタジオ 取締役
能勢 雄一 様
「映像業界について」 3405 教室
司会進行：斎賀先生
- (2) 株式会社ビビット マーケティング事業部
ワークショップデザイナー 田中 美実 様
「ポートフォリオについて」 3306 教室
司会進行：瀬戸先生
- (3) 株式会社アプリケーションプロダクト 採用
担当 飯田 範子 様
「IT 業界について」 3307 教室
司会進行：塚本

株式会社 黒澤フィルムスタジオからは、メディア情報学部の昨年の卒業生（助川貴郁様）を含めた3人の若手にも参加していただいた。

(1)に参加した学生の振り返りシートには、「自分が思っていたよりも年取が高く驚いた。映像業界では、いつ自分が売れるかわからない。そこまでの下積みが大事で、人と人とのつながりが大切。もっとかたい話かと思ったらくだけていて、とても聴きやすかった。話を聞いていると、とても面白く興味が湧いて楽しそうだと思った。チームとしてやっていくことが大事」、「現場の話や給与の話をもっと具体的に聞けてよかった。映像を作るのに沢山のお金を使っているのに驚いた。人と人の関係をもっと大切にしようと思った」等が述べられていた。

(2)に参加した学生は「ポートフォリオとは何か、ポートフォリオをつくるにはどうすると良いかなどを知ることができて良かったです。また一つでやって終わらせず、一回作ったら他の誰かにみてもらって改善点を教えてもらって直すことができるのも良いと思いました」、「今日の講演を聞いて学んだことは、ポートフォリオを作成する上

での POINT です。前半で企業側に見てほしい、知ってほしい自分のスキルを置くことで、企業側の目にとまる可能性を増やすことを、今日聞けなかったら、自分でポートフォリオを制作した順に1年次に作ったものを配置していただろうと思います。また、今後の方針も決まりました。それは自分の武器を多くつくることです。話の中で数より幅を意識しようと言っていた時に、何故だろうと疑問に思ったが説明を聞いて納得しました。それで方針が決まったのです。自分のポートフォリオを作るときの参考にします。今日のお話や、見せていただいたポートフォリオなど有難うございました」等が述べられていた。

(3)に参加した学生は「コンサルという役割があるのは知っていたが、今回の講義を通してユーザーのニーズを聞くという役割をこなしている事が分かりました。IT 業界の分野は大体3つぐらいだと思っていたが、6つぐらいあることが分かった。さまざまな経験談が聞けてとても満足した」、「入社してから詳しいことについて学べるのが驚きでした。また新聞の読み方を伝授してもらったのでやってみようと思いました。政治や経済のことなど知っておかないと社会に出たときにこわいことになるんだということを知りました。また就活のゴールは内定ではなく、人生という長い期間で捉えることを教えてもらったので就活のイメージも変えていきたいと思いました」等が述べられていた。

2.2.3. 「インターンシップについて」

第14回は、マイナビ担当者によるインターンシップの説明を行った。2年秋学期に本授業で就職活動についての大まかな流れを学び、3年の本番前のこの時期に、インターンシップを体験するように企画した。マイナビの講師とも事前に講義内容を打ち合わせ、インターンシップの種類と期間など基本的な説明、インターンシップの検索方法や申込方法、またマナーなど初歩的なガイダンス内容となるよう打ち合わせた。授業中には、実

際にマイナビ登録も行った。

受講者は「2年生から就職活動をするのは嫌だなと少し思っていました、2年からいきなり面接などをするわけじゃないし、インターンシップも自分が考えるよりかたいものではないのかなと今日のビデオを見て思ったので、2年生のうちの一つぐらいインターンシップに行こうかなと思いました」、「インターンシップって聞くと3年4年にならないとできないと思っていたので2年のうちにできるのを知ることができた。…7割近くがインターンシップに参加し、なおかつ4社とか沢山行っていると聞いて時間をしっかり考えて使い、たくさん経験を得られたらよいなと感じた」とインターンシップに関する情報を具体的に得たことから就職活動を前向きに考え始めた様子がかがえた。

2.2.4. 「第15回授業」

第15回は最終回としてのまとめを行った。ここではキャリア教育・就職支援課の枇杷木氏から本学のインターンシップ情報についての具体的な検索サイトの紹介なども含め案内いただいた。

最終回の振り返りシートには、「今まで就職やインターンのお話を聞いてきた際に、一般企業や映像関連のものはよく教えてくれ、一般も受けることを視野に入れることができていたが、図書館関連の話は全然教えてもらえる機会が少なく、あまり乗り気ではなかったが、今回は図書館関連でも話があがっていて、とても興味を引かれた。それに加え、キャリアセンターに図書系のものが置いてあるというのは、本当にありがたい情報だった。これからは、情報を待っているのではなく、自分から行動を起こして自ら情報を得ていきたい」、「先週に引き続き、就職のお話を聞いて改めてより早く準備をはじめなければならないなと思いました。キャリアセンターにははりにくいなと思っていましたが、そんなことを考えるよりも早く準備を進めて就職への不安をすこしでもとりのぞいた方が自分のためになると感じました」などが述

べられていた。

上記の振り返りシートには図書館関連の情報提供がほとんどなかった点などが言及されていた。メディア情報学部では、多様な方面への就職を希望している学生が在籍するため、これらの全てを合同授業で網羅するのはなかなか難しいが、授業ではこうした点にも配慮しながら授業運営をしていくことが求められることが改めて認識された。

2.3. 担当教員の授業

ここでは「メディア情報とキャリア」を担当した教員が実施した授業内容の特徴的な部分を報告する。

2.3.1. 担当教員授業（1）斎賀

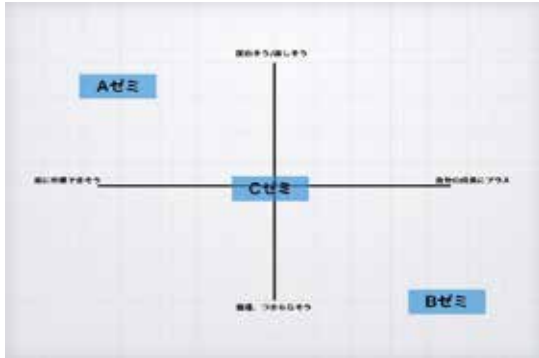
「メディア情報とキャリア」は2年次の秋学期に配当されている必修科目であり、その講義期間中に大学専門課程への大きな分水嶺となるゼミナール選定がある。斎賀担当回ではその時期に合わせて、2年までの自己の学習の振り返りと、それを踏まえたゼミ選定を意識付けさせるワークとレポート作成を行った。

3年次、4年次に渡るゼミナールは大学で学ぶ上で最も重要な過程であり、学生の大学での学習、研究の集大成となるものだが、現実的にはその意識に欠ける学生も多く、「楽そう」「優しそう」「友だちと一緒に」といった意識で所属ゼミを志望するケースが散見される。その安易な発想を上から目線で否定してもその種の学生には響かないので、本授業回ではワークと友人とのディスカッションにより意識付けを誘う方法論を採った。

まず最初に以下のようなプリントを配布する。

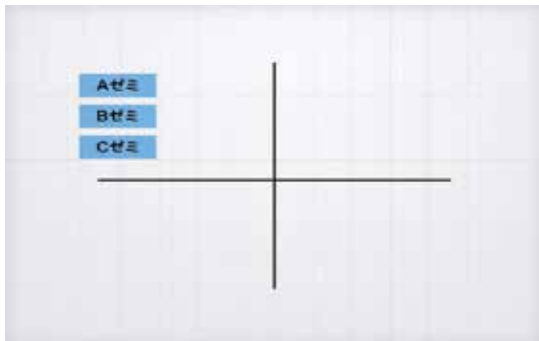
図のAゼミ、Bゼミ…といったラベルはスクリーン上のPowerPointのみに表示。配布プリントは図のみ。

1. 自分が検討中のゼミナールをいくつでも図の上にマッピングさせる。この作業は5分で、直観的に行わせる。
2. その記入結果を近くの学生同士グループとなっ



て見せ合う。そして互いにコメントをさせる。周囲の学生と意見（イメージ）が一致することもあれば食い違うこともある。その場合、理由をお互いにしゃべらせる。その過程で学生たちは「楽」「面白い」「自分にプラスになる」ことの意味を考えはじめる（15分）。

- 次に軸に指標の入っていないプリントを配布する。



軸の指標を個人単位で考え、記入させる（5分）。この時、自分にとってなんの軸（要素）がポイントなのか、十分自問するように指導する。軸の構造から、学生は相反する要素、を意識する。

- 自分の作成した軸に先ほどの検討中ゼミの名をマップさせる（10分）。
多くの学生で1枚目の図とゼミナールのポジションが変わる。その意味を自分で考え（5分）、その後グループでディスカッションさせ

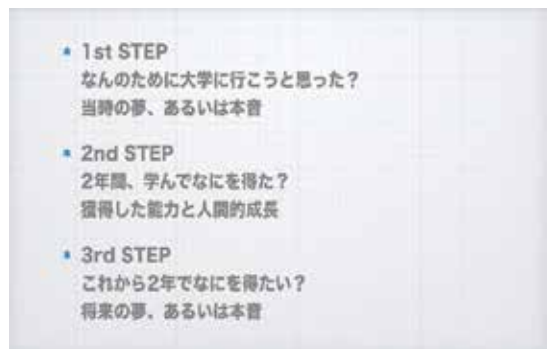
る（15分）。

このワークの中で、ゼミナール選定への動機が希薄だった学生も、自分にとっての残りの時間（大学生活の意味）を考えざるを得なくなるようで、この手のディスカッションには珍しく、学生たちから「もう少し（ディスカッションの）時間が欲しい」という声が複数上がる結果となった（10分延長した）。

- 授業のまとめに入る。



この授業回の目的はゼミナール選択への明確な意識付けのための振り返りとこれからの目的意識を持たせることにある。そのため、3つのステップでの間を行い、次回授業日までにメールで回答させた。
問は以下のようなものである。



前述のように「メディア情報とキャリア」は2

年次の後期、つまり大学生活の折り返しの前に配置される科目である。大学自体は4年間の修学期間を持つが、学びのプロセスとしては、この折り返しをもって専門課程を強く意識し、受動的な学びから能動的な学びに意識を変えていって欲しい時期である。

この3ステップは順に回答する中で、それを意識できるように考えた。通常、この手の質問にはタメエ的な回答が多くなるものだが、ここまでの授業と友人とのディスカッションで雰囲気も気持ちも温まっているため、届いたメールはゼミナール選択（大学生活の折り返し）を迎えた学生たちの素直な声を得られたように思う。以下にくつかの回答を抜き出してみる。

1st STEP

- ・自分は当時東京の大学を目指していたがAOも受験もことごとく落ちて、ここは遠いが当時のやりたい事は似ていたため受けることにした。（中略）今通ってみてこっちで良かったと思っている。
- ・みんなが大学に行くみたいだったので大学に行こうと思いました。また、中学生の時の塾の先生が大学を楽しそうに行っていたので行きたいと思いました。
- ・自分もこんな生活送ってみたいと思っていて、だから特にやりたいことがあったから大学にきたわけではありませんでした。
- ・当時の夢は漫画家もしくは絵に関わることができればなと考えていました。→最初は美大や絵に関する専門学校に行こうとしていましたが、（中略）当時の夢の1つにある“絵に関わること”について考え、ここを選びました。

2nd STEP

- ・メディアに関する知識を得たことで、世の中に溢れる情報を全て鵜呑みにせず考えるようになりました。
- ・高校とは全く違う授業内容に日々楽しくて仕方なく、得たものは多すぎて一概に言えません。あと私生活では思いやりを取り戻したような気が

がします。

- ・初対面の人と話すことが多かったため、コミュニケーション能力があがり、前よりも人見知りがなくなった。
- ・人との距離のとり方。何でもかんでも自分のせいにはしない精神。直ぐに人見知りしたり、疑ったりしない考え方。辛い時に誰かに甘えること。
- ・理論的に考える力です。高校生活では先生の授業を聞いてノートを取るだけでしたが大学での授業はそれだけではなく、自分の考えをレポートにまとめたり、課題の根本を理解しまとめるということが増え、そのために考える能力が今までよりさらに培われて来たと思います。

3rd STEP

- ・私は残りの2年間で、自分の力で作品を作り上げる力と能力を得たいです。
- ・人生の中で1番時間があるこの時期を無駄にしないよう努力しようと思う。
- ・現在私は司書の勉強をしつつ記録情報論などの資格に挑戦していますが、残すところあと二年となったことを受け、どちらを重点的に学ぶか決めたいと考えるようになりました。
- ・今までは音響方面に進もうと思っていたけど今は、デザインの方に興味湧いてきて来年のゼミはデザイン関係のゼミを取った。

学生によって意識の差はもちろんあるが、総じて大学の専門課程の意味を捉えはじめているのが重要だと感じる。何人かの回答にあるように、自分のための学び、という意識を持つようになった学生は、自己の将来と残りの学びをどうリンクさせていくか、を模索し始める。そういう時期にタイムリーにそれを意識づける講義を展開することで、学生の自発的成長を促すことができるはず。守備範囲が漠然とするきらいもある「メディア情報とキャリア」であるが、今回はこのような実験的展開を持って、学生を刺激する授業を試行してみた。

2.3.2. 担当教員授業(2) 瀬戸

「メディア情報とキャリア」は必修科目であり、3つのクラスに自動的に振り分けた学生を対象に、3人の教員が共通のテキストを使用して行う授業である。論文執筆法のように、教員を選べる事前登録科目ではない。従って、「メディア情報とキャリア」では、3クラスが基本的に毎回同じ内容の授業となるように心掛けた。ただ、それでも経験を踏まえて独自の工夫を加えたところもあった。以下二点、紹介したい。

第一は、「情報分析力」を扱った第5回の授業である。テキストでは、三和銀行(現三菱UFJ銀行)の「子供の教育に関する調査95」をもとに書かれた読売新聞の記事「(1996年4月17日付け朝刊)が題材として、取り上げられた。

三和銀行の調査は、学習塾や家庭教師、通信教育といった補助教育を受けている子供がどれくらいいるのか、また費用はどのくらいになるか等について、96年1月の店頭アンケートをもとにまとめたもので、735人から回答を得た。

読売新聞の記事は、このアンケート結果を紹介。各種数字を並べたうえで、「補助教育を受けている幼稚園児の増加が著しく、景気停滞にも関わらず『受験ブーム』の健在ぶりを見せつけている」と結論付けた。見出しは、「幼稚園児も4割超す～塾・家庭教師・通信教育」というものだった。

これについて、「客観的読解」と「批判的読解」をせよ、というのが、この時間の課題である。記事は、一通り読んだところでは、特に変なところや間違っているところは見当たらない。学生にとっては、「客観的読解」はともかく、「批判的読解」というのは、難しかったようだ。初めは戸惑いが広がった。

しかし、この記事には致命的欠陥がある。

実は、私は毎日新聞記者時代——社会部の遊軍だったか文部省担当だったか定かではないが——、この三和銀行調査の記事にしようと思ったことがある。

三和銀行に限らず、銀行や生命保険会社、デパー

ト、鉄道等の企業は、様々な広報資料を新聞社に送って来る。業務に直接関わる事項、例えば新製品の発売や催し物等については、記者発表という体裁を取り、担当する部局(例えば経済部)が取材して記事にすることが多い。しかし、企業は、業務に直結しないことについても、頻繁に情報提供をしてくる。狙いは、企業のパブリシティであるが、直接商品を宣伝するより、イメージアップにつながるかもしれないの見方もあり、企業は、工夫を凝らし、手を変え、品を変えて、マスコミに資料を送りこむのである。今回の三和銀行調査や、第一生命の「サラリーマン川柳」などは、この範疇に入る。「サラリーマン川柳」は、現在も大きく報道されており、顕著な成功例といえる。

こうした資料は、多くの場合、新聞社には郵送やファックスで届ける(この場合は社会部遊軍に回って来る)か、関係記者クラブのボックスに入れる(記者会見するまでもない案件なので資料のみの提供。「投げ込み」といわれる。この場合はクラブ担当記者が処理する)。

さて、この三和銀行の調査資料を見たとき、ハタと考えこんだ。塾や家庭教師等をどれだけの家庭が利用しているのか、これらの経費がどれくらいになるか、というのは、読者にとっては関心の高いテーマである。あまり調査例はなく、以前、本紙でも記事になって掲載されている。調査の数字を使ってそれなりに読ませる記事に仕立てるのは容易だった。

しかし、よく読むとさまざまな疑問が生じてくる。何よりもサンプルが店頭でのアンケートということが、引っかかる。数自体少ないが、地域も年齢も性別も定かではない。以前の調査との比較もストレートにはいかない。これでは統計的に意味を持たせるのは無理で、何らかの結論を導き出すのも難しいと思わざるを得なかった。その時からかどうかは残念ながら覚えていないのだが、この三和銀行調査は、毎日新聞では記事化していない。

問題の読売新聞記事は、そうした事情についてはほとんど触れず、この調査だけから、「景気停

滞にも関わらず『受験ブーム』の健在ぶりを見せてつけている」と、時流に添った解釈を加えており、一定の方向性での結論を導き出している。「批判的見解」の材料満載の記事と言える。

授業では、こうした経験を踏まえつつ説明した。学生からは「今までニュース新聞記事について批判的読解をしたことはなかった。最初は何が間違っているか分からなかったが考えながら読んでいくと、たくさん疑問点が出てきた。これから気をつけて見ていきたい」などの声が多数聞かれた。

読売記事は、もともと荻谷剛彦氏の著書からの引用によるものだが、メディアリテラシー教育という視点からみても、反面教師的な意味で優れた教材になっている。

第8回の「構想力」は、「語彙力を強化する」が課題だった。語彙力は、私が2年次春学期のブレゼミにおいて長年取り組んできたテーマの一つであり、そのときに使用してきた「語彙数推定50問」を生かすことにした。

「語彙数推定50問」は、井上ひさし（余談ながら我が高校の先輩。同級生に菅原文太がいた）の「にほん語観察ノート」（2004年、中公文庫）に紹介されている。作成したのは、NTTコミュニケーション科学基礎研究所。50の語の中で、いくつまで知っているかによって、語彙数（感嘆詞と固有名詞を除く）を推定するというものである。

50の語、というものは以下である。

- ①チャンピオン ②祝日 ③爆発 ④ライン
⑤さつま芋 ⑥毒ガス ⑦枝豆 ⑧過ごす ⑨朝風呂 ⑩そもそも ⑪見極める ⑫香ばしい ⑬本題 ⑭エンゲル係数 ⑮泊まり込む ⑯預け入れる ⑰言い直す ⑱たしなみ ⑲英文学 ⑳はまり役 ㉑ごろ合わせ ㉒労力 ㉓しのぼせる ㉔勃発 ㉕宿無し ㉖目白押し ㉗請負い ㉘塗り箸 ㉙気丈さ ㉚茶番 ㉛大腿骨 ㉜術中 ㉝泌尿器 ㉞血税 ㉟悶着 ㊱腰元 ㊲裾模様 ㊳旗竿 ㊴かんじき ㊵すっこむ ㊶迂曲 ㊷告諭 ㊸辻番 ㊹ライニング ㊺輪タク ㊻懸軍 ㊼陣鐘 ㊽泥濘 ㊾釜がえり ㊿頑冥不霊

このうち、例えば①から⑩まで知っていて、⑪以下が分からないと、推定語彙数は8800語。以下、⑮までなら1万3000語、⑳までなら1万8000語、㉕までなら2万3000語、⑳までなら3万語、㉕までなら3万9000語、④までなら5万語、④までなら6万語、⑤までなら7万語、という推定になる。

人間は、言語で自分と世界をつかまえている。言語を豊富にすることで世界が広がり、より豊かなものになる。学生は、語彙数を増やすことの重要性は分かっており、自身の語彙数が少ないことも漠然とは感じている。しかし、少ないといってもどの程度の水準なのかは、つかみにくく、語彙数を増やす必要性については、今ひとつピンと来ないというのが、実情であろう。

授業では、この「語彙数推定50問」のプリントを配り、グループごとに各自が言葉の意味を説明し合う、というスタイルを進めた。学生は興味津々。分からないと「ウン」と悔しがり、グループの誰かが答えを出すと感心するなど、終始、活発な議論が展開された。多くの学生が躓いたのは、「⑭エンゲル係数」で、⑳過ぎると怪しくなり、㉕くらいからは、お手上げ、という態だった。「腰元」や「辻番」などは時代劇によく出てくる言葉だが、今時の学生はほとんど見ていないのだろう。

参考までに使用頻度の多い20語は、①これ②居る③ない④ここ⑤行く⑥する⑦いい⑧やる⑨くる⑩なに⑪ある⑫いや⑬こっち⑭こう⑮言う⑯どこ⑰取る⑱そう⑲なる⑳たべる。満5歳になった幼児の語彙数は、1050語前後だそうである。なお、学習指導要領によると、習得する英語の単語数は義務教育終了時点で1200語、高校卒業時点で3000語ということになっている。

大学生としては、母国語であるから英語の10倍、3万語程度は欲しいことを説明し、できるなら「5万語の男（女）」になってほしいと、注文をつけた。

学生の振り返りシートには、「普段スマホの変換に任せているので、後半読めない漢字が出てき

て危機感を覚えた」「そんなに数をこなせず、自分の語彙力の少なさを改めて痛感した」「多少は言葉を知っているという自負があったが、それでもまだ知らない言葉があることを思い知らされた」等々の感想が寄せられた。その認識をもとに、課題である語彙を増やす方策についても、「ニュースを見たり、新聞を読んだり、と世間の情報に触れるように心掛ける」「毎月2、3冊の小説を読む」「ネットや新聞で一通り見て、分からないところをピックアップしてそこを覚えていく」等々の意欲的な意見が出てきた。

ちなみに私は、「④ライニング」で頓挫した。5万数千語ということになる。「にほんご観察ノート」によると、井上ひさしは、「④懸軍」で躓いたという。6万語である。井上は「結構、永く生きてきたのにたったこれっぽっちかと情けない気がします、しかし、『これ』『居る』『ない』ぐらいしか知らないころから、よく『懸軍』まで来ることができたものだと、自分の頭を撫でてやりたい気もするのです」と書いている。

なお、新明解国語辞典によると、「ライニング」とは、「薬品におかされるのを防ぐために、ゴムやエポナイトなどを、入れ物の内がわに張ること。うちばり」であり、「懸軍」とは、「(後方との連絡が無いまま) 敵地に深く入り込むこと。また、その軍隊」のことである。

さらに余談を連ねれば、私は、毎週土曜日に毎日新聞に掲載されるクロスワードパズルにはまっている。「タテのカギ」「ヨコのカギ」が結構ユニークで面白く、2回に1回は、初めて聞く言葉が出てくる。この年齢でも、辞書で調べて語彙を増やし、世界を広げるのはなかなか楽しい。残念ながらもう機会はないが、ゼミでも使えるのではないかと、思っている。

特別講演 「ポートフォリオについて」

12月5日の講演会のうち、「ポートフォリオについて」は、株式会社ビビビットの田中美実さんを迎えて行われた。株式会社ビビビットは、クリ

エイティブ職採用の支援に取り組む企業で、田中さんは、マーケティング事業部のワークショップデザイナーを務めている。

田中さんは、最近の就活学生によるポートフォリオ傑作集を多数持参のうえ、準備の仕方や作成方法のポイントなどを丁寧に説明した。

2年生にとっては、就職活動はまだまだ先の話という感覚が一般的であろう。しかし、ポートフォリオを作成するには、まず、自分がどんな仕事をしたいのか、どんな企業を志望するのを見極めなければならない。企業研究やスキルアップの時間も必要で、準備期間はしっかりとっておいたほうが良い、との田中さんの話は、しっかりと学生に届いたようだ。いつになく真剣にメモを取り、講演終了後も、かなりの数の学生が教室に残り、ポートフォリオ傑作集選を熱心に見入っていた。

授業の様子がよく分かるので、何人かの学生の振り返りシートを少し長めに紹介したい。

「ポートフォリオは、自分の志望する企業とマッチする作品にまとめる必要があることを学んだ。そのためには、企業をしっかりと調べるのは当たり前だが、自身のコンセプトをしっかりと考え、ソフトなどにも気を配って作成していかなければならない。先輩方のポートフォリオは、どういった考えで、どう作り、どうまとめているか、のヒントを得ることができ、実際に自分が作成する際の助けになると感じた」

「デザインの仕事に関する考え方や感じ方が変わった。そもそもの就活に対する考え方が変わった。先手必勝とまではいかないが、最初が肝心で、3年生の4月から、しっかり自己分析をしていきたいと思った」

「ポートフォリオを作るには、かなり早い時期から考えをまとめていかなければならないことを知った。ポートフォリオの作り方にも参考になる情報がたくさんあった。便利なサイトがあるので使ってみたい。実際にポートフォリオを手にとって見てみると、レイアウトや説明が分かりやすく、読み手に伝わるように作っていることが

よく分かった」

「ポートフォリオについての考え方が大きく変わった。自分の単なる作品集ではない。自分のスキルを志望企業に伝え、アピールするための資料であるということ意識して、作っていかねばならない。今からでもアピールできるスキルを高めておくことが大切だと思った」

「見せてもらったポートフォリオには、制作時間や使用したスキル、ターゲット、コンセプトが載せられていて驚いた。素晴らしい作品ばかりで、才能の差を感じたが、まだ時間がある。頑張ろうと思った」

（振り返りシートは、趣旨を生かしつつ、一部書き換えてある）

2.3.3. 担当教員授業（3）塚本

塚本が担当した授業を、最終回の授業で学生が提出した「振り返りシート」から振り返る。

最終回の振り返りシートでは、「半年間のこの『メディア情報とキャリア』の授業で“一番記憶に残って役に立った”と感じた講演や講義内容がありましたか？あれば具体的に記述してください」の設問を設けた。この質問に対して受講生の回答が重複した内容を挙げると、「一番記憶に残っているのは、アンケートをとってその結果をプレゼン発表したこと」、「みんなの前で話すことが多くてこれは良い力につながると考えた」、「プレゼンが一番記憶に残りました。好きなことを語るだけでもこんなに難しいんだと感じました」、「自己PRについての授業が印象に残りました。就活に向けて大事なところであり、自分のことを話せるように実際に前で全員に向けて発表をしたので、話す練習にもなったのでとても役立つ授業でした」、「自分の長所を書き出してPR文を作る講義は自分を分析するきっかけになり、また少し自信をつけることのできる内容でした」、「自己PRの書き方。長所は短所の言いかえで見つけられる」などがある。ここでは受講生が述べた授業内容について若干説明する。

授業では、就職活動時に求められる人の前で話す面接やプレゼンテーションに備え、出来るだけ人前で話す機会を多く設けるので、受講者には発表の場に繰り返し立つことで「慣れる」ように伝えた。授業は、基本的にテキストの内容に沿ってすすめたが、運営方法は学生自身が座って講師の話聞く座学ではなく、受講生自身が授業の中で自主的に活動し経験を通して身につけられるような形態とした。自己紹介、自己分析、グループによるアンケート調査の企画・実施と結果の分析・発表、各自の「お気に入り」の発表などである。

学生が振り返りアンケート回答で記述している「自己PR」「自己分析」の授業では、まず学生自身の長所と短所をリストアップさせた。大半の学生が長所よりもはるかに多くの短所を挙げたが、ここで自身が短所だと捉えている特性は、表現を換えれば長所となることを気づかせながら、具体的な経験や事例を組み込みながら自己PRの文章を書くように勧めた。

テキストの第1章の情報収集力に掲載されているアンケートでは、調査実施は情報を収集するだけでなく、情報分析力（第2章）、表現力（第5章）、課題発見力（第3章）のためのグループプロジェクトとして取り組んだ。グループで自分達に関心のあるトピックについて話し合い、質問の内容と項目を検討させ、調査回答結果がより分かりやすいデータとして発表できるよう質問内容や表現を再検討し、アンケート調査の結果と分析結果を発表する実践とした。

日本語が流暢ではない外国人留学生も懸命に発表をしてくれた。人前での発表を苦手としている日本人学生も多い中、外国人留学生が頑張る姿が刺激になったからか、学生が全体的にプレゼンや発表には主体的に参加し、最終的な振り返りアンケートでも「発表の機会が多かったことが良かった」と記述している回答が目立った。

2.4. キャリア教育・就職支援課（枇杷木）

「メディア情報とキャリア」との関わりは3年

ほど前から続いている。昨年度までは第14回のようにマイナビ担当者が登壇していたため、事前の打ち合わせで方向性を決めさせていただくことで対応していたが、今年度はそれに加えて卒業生の座談会、民間企業3社による特別講演会、最終回のインターンシップ情報提供の3つについて塚本教授から相談をいただき関わった。卒業生の座談会及び民間企業3社の講演会は、登壇者の選定から日程・内容の調整を塚本教授と打ち合わせた上でを行い、インターンシップの情報提供については、メディア情報学部の進路希望特性を考慮してクリエイティブ系や司書関連の話を織り交ぜながら伝えていった。

今年度の受講学生は、就活ルールの見直しが騒がれた世代であり、他大学や就職情報社などから何かと話題に挙がる学年である。私個人としてもキャリアセンターの中でメディア情報学部の学生を担当してきた中でも早期に接点を持ちたいという想いがあった学年であったため、今回の連携は大変ありがたく有意義なものになったと感じている。

3. 「論文執筆法」

3年生を対象とした「論文執筆法」も2018年度は3クラス開講された。本学では全ての4年生に必修となっているゼミ論を書く前段階の準備として開講されている。ここでは、3.1. 授業シラバスと位置づけ、3.2. 授業内容、3.3. 担当教員授業の順に紹介する。

3.1. 授業シラバスと位置づけ

「論文執筆法」は3年生対象の選択授業であるが、本学ではゼミ論の執筆が不可欠のため履修を推奨している科目で、「事前登録科目」である。

シラバスは表2に示した。シラバスの内容は、毎年、担当教員が持ち回りで担当するため、前年度からの変更は加えず、授業のサブタイトルは「ゼミ研究の内容や制作物の説明を論理にまとめ、相手に確実に伝える技術を学ぶ」とした。講義内容

は「論文執筆に必要な能力を身につけるために、まずは、問題設定、情報収集、分析、論文執筆、成果発表という一連の研究プロセスを学ぶ。次に、学術論文執筆に必要な文章表現能力を実際の執筆演習を通じて修得する。さらに、論理的・客観的な表現を身につけるために、グループ討論・プレゼンテーションも実施するため、毎回の講義への出席を重視する。本授業は、ゼミ研究の学習成果(調べたことや考えたこと、あるいは作品の解説や制作過程)を、誰でも理解できる形(論文形式)にまとめ、相手に確実に伝える技術を身に付けることも目的とする。そのために、受講者には3千字程度の小論文を書いてもらう。」としている。到達目標は「この科目の到達目標は、4年次開講のゼミナールⅣで課されるゼミ論文(研究・制作)執筆に必要な能力を身につけることである。そのために、論理的で明解な文章作成能力、自ら問題を発見し、解決するための情報収集・分析能力を身につけ、成果を論文という形式で学術的プレゼンテーションできる能力を身につけることを目指す。」である。

到達目標となる駿大社会人基礎力は「課題発見能力、情報収集能力、読解力、論理的・多面的思考力、プレゼンテーション能力、文章力」である。また卒業認定・学位授与方針との関連では「この科目は、ディプロマ・ポリシー(学部)の『(2)考える力』、『(4)協働する力』、『(5)総合的な力』と関連しており、さまざまな角度から物事をみつめ、広い視野から筋道を立てて考える力を養う」としている。関連科目は「ゼミナールⅠ、ゼミナールⅡ、ゼミナールⅢ、ゼミナールⅣ、発展研究」で、ゼミナールでの質の高いゼミ論文完成を目指した授業として位置づけられている。テキスト・参考書には、参考書として、戸田山和久(著)『新版論文の教室—レポートから卒論まで』NHK出版、石黒圭(著)『論文・レポートの基本—この1冊できちんと書ける!』日本実業出版社、河野哲也(著)『レポート・論文の書き方入門第3版』慶應義塾大学出版会、佐藤望(編著)『アカデミック・

表2. 「論文執筆法」2018 シラバス

サブタイトル	ゼミ研究の内容や制作物の説明を論理にまとめ、相手に確実に伝える技術を学ぶ																														
講義内容	論文執筆に必要な能力を身につけるために、まずは、問題設定、情報収集、分析、論文執筆、成果発表という一連の研究プロセスを学ぶ。次に、学術論文執筆に必要な文章表現能力を実際の執筆演習を通じて修得する。さらに、論理的・客観的な表現を身につけるために、グループ討論・プレゼンテーションも実施するため、毎回の講義への出席を重視する。本授業は、ゼミ研究の学習成果（調べたことや考えたこと、あるいは作品の解説や制作過程）を、誰でも理解できる形（論文形式）にまとめ、相手に確実に伝える技術を身につけることも目的とする。そのために、受講者には3千字程度の小論文を書いてもらう。なお、事前登録科目のため、ゼミナールの担当教員に必ず相談し、「事前登録シート」を提出してください。																														
到達目標	この科目の到達目標は、4年次開講のゼミナールⅣで課されるゼミ論文（研究・制作）執筆に必要な能力を身につけることである。そのために、論理的で明解な文章作成能力、自ら問題を発見し、解決するための情報収集・分析能力を身につけ、成果を論文という形式で学術的プレゼンテーションできる能力を身につけることを目指す。																														
到達目標となる駿大社会人基礎力	課題発見能力、情報収集能力、読解力、論理的・多面的思考力、プレゼンテーション能力、文章力。																														
卒業認定・学位授与方針との関連	この科目は、ディプロマ・ポリシー(学部)の「(2)考える力」、「(4)協働する力(5)総合的な力」と関連しており、さまざまな角度から物事をみつめ、広い視野から筋道を立てて考える力を養う。																														
関連科目	ゼミナールⅠ、ゼミナールⅡ、ゼミナールⅢ、ゼミナールⅣ、発展研究。																														
テキスト・参考書等	【参】 戸田山和久(著)『新版 論文の教室—レポートから卒論まで』NHK出版 【参】 石黒圭(著)『論文・レポートの基本—この1冊できちんと書ける!』日本実業出版社 【参】 河野哲也(著)『レポート・論文の書き方入門第3版』慶應義塾大学出版会 【参】 佐藤望(編著)『アカデミック・スキルズ—大学生のための知的技法入門』慶應義塾大学出版																														
授業外における学習方法及び必要な時間	「毎週必ず新聞記事・関連資料を読み、内容をまとめること(1.0時間)」、「次の授業で使用する素材・文章を準備すること(1.5時間)」、「授業内容を確認し、理解の不足している用語等を確認すること(1.5時間)」など。																														
成績評価方法	毎週の課題(40%)、および3千字程度の最終レポート(60%)で評価する。																														
課題に対するフィードバック	授業内に作成した課題に対して、次週の授業に課題を返却しながら解説する。																														
授業計画	<table border="1"> <tr><td>第1回</td><td>卒業論文とは</td></tr> <tr><td>第2回</td><td>論文の構成1：起→承→転→結</td></tr> <tr><td>第3回</td><td>論文の構成2：序論→本論→結論</td></tr> <tr><td>第4回</td><td>資料収集の方法、情報検索の方法</td></tr> <tr><td>第5回</td><td>テーマの探し方</td></tr> <tr><td>第6回</td><td>論文の読み方</td></tr> <tr><td>第7回</td><td>論文の書式と文章の書き方</td></tr> <tr><td>第8回</td><td>資料のまとめ方</td></tr> <tr><td>第9回</td><td>データのまとめ方</td></tr> <tr><td>第10回</td><td>論文執筆1：本論</td></tr> <tr><td>第11回</td><td>論文執筆2：序論と結論</td></tr> <tr><td>第12回</td><td>論文執筆3：引用の仕方、脚注、付録、文献表</td></tr> <tr><td>第13回</td><td>論文執筆演習1：本論の執筆</td></tr> <tr><td>第14回</td><td>論文執筆演習2：序論、結論の執筆</td></tr> <tr><td>第15回</td><td>論文執筆演習3：引用・脚注と総仕上げ</td></tr> </table>	第1回	卒業論文とは	第2回	論文の構成1：起→承→転→結	第3回	論文の構成2：序論→本論→結論	第4回	資料収集の方法、情報検索の方法	第5回	テーマの探し方	第6回	論文の読み方	第7回	論文の書式と文章の書き方	第8回	資料のまとめ方	第9回	データのまとめ方	第10回	論文執筆1：本論	第11回	論文執筆2：序論と結論	第12回	論文執筆3：引用の仕方、脚注、付録、文献表	第13回	論文執筆演習1：本論の執筆	第14回	論文執筆演習2：序論、結論の執筆	第15回	論文執筆演習3：引用・脚注と総仕上げ
第1回	卒業論文とは																														
第2回	論文の構成1：起→承→転→結																														
第3回	論文の構成2：序論→本論→結論																														
第4回	資料収集の方法、情報検索の方法																														
第5回	テーマの探し方																														
第6回	論文の読み方																														
第7回	論文の書式と文章の書き方																														
第8回	資料のまとめ方																														
第9回	データのまとめ方																														
第10回	論文執筆1：本論																														
第11回	論文執筆2：序論と結論																														
第12回	論文執筆3：引用の仕方、脚注、付録、文献表																														
第13回	論文執筆演習1：本論の執筆																														
第14回	論文執筆演習2：序論、結論の執筆																														
第15回	論文執筆演習3：引用・脚注と総仕上げ																														
更新日付																															

(出所) 駿河台大学メディア情報学部シラバス
https://www.surugadai.ac.jp/gakubu_in/media/

スキルズ—大学生のための知的技法入門』慶應義塾大学出版、を挙げている。

本授業は、メディア情報学部2018年アクションプランでは、「3ポリシーに基づく教育の実践」で、継続課題として、「社会人基礎力をさらに身につけるため、3年次秋学期授業『論文執筆法』を3クラス開講し、文章による表現力ばかりでなく、問題設定からグループ討論・プレゼンテーションまで、アクティブラーニングを見据えた授業を実施する」を掲げており、事前登録科目ではあるができるだけ多くの学生が履修するように学部でも奨励し、3年次生の75%以上が履修した。

3.2. 授業内容：検索実習

2018年の論文執筆法の授業は3クラスが金曜の2限、3限、4限の開講であった。事前に担当教員間で授業の到達目標や授業方法などの確認と打ち合わせを行った。また本年度の受講生の中には、編入の留学生が多いクラスもあったことから、日本語が前提となっているゼミ論を英語でも認めるか、また英語によるゼミ論の手引きなどをどうするか等、規程のない事例への対応もあり、教務委員長と協議しながら授業をすすめた。

表2のシラバスにあるように、第4回の授業では「資料収集の方法・情報検索の方法」となっている。ただ配置された教室にパソコンがないため、メディアセンターで情報検索を実習形式で行うことが可能かを学術情報課に打診した。情報検索については、学生は1年次にメディアセンター見学の際にOPACについては説明を受けているが、実際にOPACを利用して検索を行ったことのある学生は限られていると予想されたことから、検索実習を3クラスで実施できるように学術情報課に相談した。学術情報課でも独自に検索実習講習会を開催しているとのことで、3クラスで3回の検索実習を授業内で実施していただけることになった。検索実習のテーマはそれぞれ「使ってみようOPAC」、「雑誌記事ガイダンス」、「新聞記事ガイダンス」である。検索実習の実施日はクラ

スにより違いがあるが、検索実習の前に学生には、論文のテーマを絞り込むように促し、検索実習時には、自身のテーマについての検索を行えるようにした。

3.3. 担当教員の授業

ここでは「論文執筆法」を担当した教員が実施した授業の特徴的な部分を紹介する。

3.3.1. 担当教員授業(1) 村越

本科目は、3.1.に示されているとおり、ゼミ論文(研究・制作)執筆を支援するための科目のひとつである。15回の授業のうち、前半の授業は一般教室で実施し、検索実習後の授業は受講者がコンピュータを利用できる環境のもとでおこなった。

(A) 論文の説明

授業は、論文とは何かを説明することからはじめられた。論文を規定する要素は、外的に規定する要素と内的に規定する要素に分けられる。外的な要素とは、論文が置かれる環境すなわち研究成果が論文として掲載される学術雑誌、学術雑誌を刊行している学術団体(学会)などである。他方、内的な要素とは論文独自の構成や書き方などである。

外的な要素に関しては、とくに、研究者や実務者が新たな知識・情報を発信するメディアとして学術雑誌が重要であること、そしてそこに掲載される論文が新たな知識等を広めるという意味で社会貢献の手段のひとつであることを強調した。そのうえで、授業で紹介した学会名鑑Web版を用いて関心のある分野の学会を選択し、当該学会が刊行している雑誌に掲載されている論文をJ-STAGE(科学技術情報発信・流通総合システム)やCINII(Citation Information by NII)によって検索することを受講者への課題とした。

研究者や実務者ではない学部学生がなぜ論文執筆の訓練を受ける必要があるのか。さらに言えば、なぜ学部学生がゼミ論文を書かなくてはならないのか。この理由については、論文が持つ性格から説明した。論文は誰が読んでも理解できる書き方

(作法) で書かれていなくてはならない。論理的な主張に基づいて読者を理解させるという書き方である。日常では接することの少ない、この特別な書き方を修得するという事は、社会貢献の手段のひとつを獲得することに他ならない。このような説明である。

では、だれが読んでも理解できる書き方とはどのようなものか。これが論文を内的に規定する要素である。具体的には、適切な「問い」を立て、「問い」に対して「答え」を導く過程を記述するという書き方である。「答え」が妥当か判断できるように書かなくてはならない。このように説明した。あわせて、「問い」に対して「答え」を導く過程を記述するためには、それに適した構成（文科系の標準的な「序論・本論・結論」形式）があることを示した。

(B) 論文作成過程

それぞれ論文を外的に規定する要素と内的に規定する要素を説明し終えたところで、論文を書くための準備に移った。それは、a) 「問い」を立て、b) 立てられた「問い」に対して「答え」を導く過程を構成表にまとめ、c) 構成表に基づいて執

筆するという一連の論文作成過程を迫体験するという内容である。これらの過程を迫体験することによって、論文を書くまえに論文の構成をイメージできると考えた。具体的には、定期刊行されている学術雑誌に掲載された論文のなかから受講者に関心のある論文を取り上げ、当該論文の内容を構成表に“再構成”するというものである。構成表の例は表3に示すとおりである。そこに“再構成”された結果によって、取り上げた論文の著者が、「問い」に対していかにして「答え」を導いたかを確認することができることを説明した。そして受講者にはいくつかの論文を配布し、それらの論文の内容を構成表に“再構成”することを課題とした。

論文を書くための準備を終えたところで、上述の a) 「問い」を立て、b) 立てられた「問い」に対して「答え」を導く過程を構成表にまとめ、c) 構成表に基づいて執筆するという一連の過程を、順を追って説明した。

a) 「問い」を立てる過程

先行研究を把握していなくては、なにを問題にすればよいか判断できないため、「問い」を立て

表 3 構成表の例

後藤敏行. コンピュータゲームアーカイブの現状と課題. 情報の科学と技術, 2010, 60 (2), p. 68-74				
構成	内容	章・節番号と見出し	内容	根拠資料
序論	問い、背景・理由の説明	1. はじめに	問い：日本が今後とるべきコンピュータゲームアーカイブの方策はなにか 背景：コンピュータゲームの普及とそれに伴う動きがある	文献 23
本論	方法と結果	2. なぜコンピュータゲームの保存が必要なのか？ 3. コンピュータゲームの保存に対する課題と基本戦略 3.1 メディアの短命さと複製（中略）	コンピュータゲームの普及 コンピュータゲームが持つ文化的、社会的側面への関心が高まっている市場規模の拡大 磁気ディスクや光ディスクの寿命は 20～30 年、「図書館資料の保存のため必要がある場合」のみ（著作権法第 31 条）複製可（中略）	文献 4 文献 5 文献 6 文献 7 文献 8 著作権法（中略）
結論	全体のまとめ、問いに対する答え	5. まとめと今後に向けた提言	(1) ゲーム会社とコンピュータゲームアーカイブの連携協力 (2) 図書館界のコミットメントが必要	

(出所) 筆者作成。

るに際して、もっとも重要なことは、先行研究のサーベイであるということ 강조했다。先行研究の成果を十分に踏まえて問いを立てることができれば、ゼミ論文の半分は完成したとよいほど重要な過程であると説明した。そのうえで、受講者には「問い」を立てる準備のために、新たにいくつかの論文を配布した。そして、それらと教材として利用した論文を先行研究とみなして、受講者が疑問文を作ることを課題とした。そこではとくに、だれが・いつ・どこで・なにを・なぜ・どのようにして、などの疑問詞を用いて、または比較(時間や空間)や因果などの視点から、疑問文を作るという方法が有効であると説明した。表3に示した論文を例に取り、つぎのように説明した。「日本が今後とるべきコンピュータゲームアーカイブの方策」として、「(1)ゲーム会社とコンピュータゲームアーカイブの連携協力、(2)図書館界のコミットメント」が必要という結論を前提とするとき、実際に答えられるかどうかはさせておき、つぎのような疑問文を作ることが可能である。なぜゲーム会社は独自でアーカイブズを構築しないのか、あるいはできないのか、できないとすれば、どうしたら構築が可能か、今後、どのような「連携協力」が適切か、などである。また、比較や因果の視点に基づけば、ゲーム専用機など実物を扱うことを考慮するとき、図書館の役割と博物館の役割のうち、どちらの役割が大きいか、図書館によるゲームのアーカイブズへの貢献度という点では日本と欧米ではどちらが進んでいるか、アーカイブズの普及はゲームのアーカイブズ構築を促すか、などである。

b) 「問い」に対して答えを導く過程

適切な「問い」が立てられたならば、つぎに必要なのは「問い」に対して「答え」を導く過程の説明である。「問い」に対して「答え」を導くために何をしたか(方法の説明)、その結果、どのような結果が得られたか(結果の説明)、得られた結果からどのような「答え」が導かれたか(考察)を示し、最後に論文全体をまとめて、得られ

た「答え」を評価し、残された課題を提示する、という一連の過程について説明した。

これらの過程を実現するための論文構成については、シラバスにしたがい「序論・本論・結論」形式の構成を前提としてつぎのように説明した。本論への導入部として位置づけられる序論では、「問い」の提示(本論で取り上げる「問い」は何か)、取り上げた理由・背景(なぜその問題を取り上げたのか)、先行研究のサーベイなどが記述される。本論では、採用された方法、得られた結果と考察が記述される。そして結論では、論文全体が要約され、残された課題が記述される。このような内容である。また、論文を執筆するまえに、論文の構成を構成表に整理する必要があることを説明に付け加えた。

c) 論文執筆過程

まず序論(「はじめに」)、「課題」などの見出しが付される)には1章を、本論にはいくつかの章を、結論(「おわりに」)、「結語」などの見出しが付される)には1章を割り当てることを示すとともに、章立てに用いられるポイントシステム(章節番号と見出しの組み合わせ)について説明した。

根拠資料(文献)の示し方については、バンクーバー方式(引用箇所、引用順に番号を付し、文献は本文の最後に一括して引用番号順に記載)、ハーバード方式(引用箇所、引用文献情報を付し、本文の最後に文献リストを記載)、脚注(文末注)方式(引用箇所に注番号を付し脚注(文末注)に引用文献を記載)を取り上げた。あわせて、科学技術情報流通技術基準(SIST: Standards for Information of Science and Technology)を紹介した。とくに文献の引用に際して注意すべき点として、人のものを使いながら(引用しながら)、その典拠を明示しない行為(自分のものとする行為)は、不正行為(剽窃)であり絶対にしてはいけないということ 강조했다。

根拠資料(図表)については、必ず図表に番号と見出しを付すこと、図の番号と見出しは図の下、表の番号と見出しは表の上に付すこと、図表を他

の文献から引用した場合、資料を加工して作成した場合には文献や資料を明記する必要があることなど、基本的な点を中心にして説明した。

(C) 論文作成のための作業

論文作成の過程を説明したところで、3回の検索実習がおこなわれた。検索実習後、受講者各自がコンピュータを使える環境で、論文作成のための作業がおこなわれた。論文作成のための作業とは、上述のa)「問い」を立てる過程において、課題としてそれぞれの受講者が立てた「問い」にみずから答えるために、必要な文献・資料を検索し、構成表を作成するという、論文作成のための一連の作業である。

この作業を前提として期末レポートが出された。課題はつぎのとおりである。授業で読んだ論文および配布した論文を先行研究として捉えて各自が立てた、「問い」に対して「答え」を導く過程を記述するという内容である。要件は日本語の場合3千字以上（英語の場合1650words以上）、提出物は、作成した構成表と構成表に基づいて完成させたレポート、ただし章立て、引用の仕方等については授業で配布した資料を参考にし、「ゼミ研究資料」（メディア情報学部ポータルサイト、「ダウンロード」：駿河台大学、<https://mir.surugadai.ac.jp/>ダウンロード/）に準拠すること（ただし、要約、目次は必要ない）とした。

3.3.2. 担当教員授業（2）塚本

2018年のメディア情報学部のアクションプランでは「論文執筆法」で「文章による表現力ばかりでなく、問題設定からグループ討論・プレゼンテーションまで、アクティブラーニングを見据えた授業を実施する」を掲げていることもあり、授業ではグループ討論やプレゼンテーションなどを意識した授業運営を行った。自己紹介に続き、各自が考えている論文テーマについて小グループ内での発表と討論、グループメンバーとのディスカッションの中から自身のテーマの絞り込みや、他者の関心点や視点、先行研究などへの気づきが

持てるような授業運営に心がけた。

2018年度は検索を実際に授業時間内に体験させるべく学術情報課に相談したところ、学術情報課でも独自に検索実習講習会を開催していることから授業内でも検索実習は可能との回答をいただいた。そこで早速他の先生方ともこの情報を共有し、授業で学生の調べたいテーマの大枠が決まった第5回目にOPACによる検索実習を行った。実習はメディアセンターを想定していたが学術情報課の方で7208教室を予約していただき、2回目の「雑誌記事検索」、3回目の「新聞記事検索」実習を行った。この段階で学生は検索方法に慣れた様子だった。

本授業では課題レポートは3000字としているが、第11回の授業時には1500字程のレポート提出してもらい添削とアドバイスを与えて返却し、最終授業後に3000字のレポート提出とした。

4. まとめ

「メディア情報とキャリア」については、キャリアセンターのスタッフとの連携授業が功を奏し、学生からも担当教員からも非常に評判が良い授業が展開できた。実際、2年生は「就職」と言われてもまだまだピンと来ない状況だが、授業受講後の学生からは、「これまでキャリアセンターの敷居は高くてなかなか入れなかったが、今回、キャリアセンターの枇杷木さんに授業で話を聞いてから、行ってみようかな…という気になった」といった声も聞かれた。また最終授業で行った「春学期に行けるインターンシップやイベント情報や調べ方」の情報などへの反応も良く、授業からキャリアセンターへの橋渡しが上手くできたことから、今後もキャリアセンターとのコラボを深めた授業を展開していきたい。

「論文執筆法」については、上述のとおり、専任教員3名が担当し、共通シラバスに基づいて授業をおこなった。とはいえ、教材として取り上げられたであろう論文などは、それぞれの教員が持

つ専門性を前提として選択されたはずであり、アクティブラーニングの手法に関しても担当教員の個性が発揮される部分が少なからず存在したと思われる。授業アンケートの結果を振り返るかぎり、自らの強い意思で志望する事前登録科目ということもあって、多くの受講者は楽しくゼミ論文について学ぶことができたのではないかと判断される。

本科目は、毎年同じ教員によって担当されるとはかぎらない。そこで、授業内容(ゼミ論文を完成させるための資料検索、調査・研究、論文執筆それぞれ)については、実施前に担当者が綿密な打ち合わせを実施し情報を共有しておくことが必

要である。あわせて、実施後に授業内容を検証し、次年度の改善に結びつけることも大切である。授業内容のうち、資料検索に関しては、本年度は検索に関して学術情報課職員による「情報検索ガイダンス」の導入が試みられた。このことによって、履修者の検索に関する基本的な知識とスキルを確認することができたように思われる。他方、ゼミ論文作成のためには、より専門的な資料検索技法の習得が必要ではないかとも考えられた。2018年度の経験をふまえて、2019年度の資料検索の授業については、担当教員による実施が予定されている。

A Report of 2018 Practice

“Career for Media Information Resources” and “Research and Writing Method”

By TSUKAMOTO Mieko, MURAKOSHI kazunori, SAIKA Kazuhiko, SETO Junichi, HIWAKI Youichi

[Abstract] In the Faculty of Media Information Resources, there are several major subjects taught by multiple full-time faculty members. These subjects are taught after comprehensive discussions among faculty members and a consideration of the syllabus. One of these subjects is “Career for Media Information Resources,” a required subject for sophomores; another subject is “Research and Writing Method,” a selective subject for juniors. This report is regarding the practice of these two subjects in 2018. “Career for Media Information Resources” was coordinated with considerable support from the Career Center. The schedule collaborated with the Career Center staff resulted in fascinating reviews from both students and faculty members. In “Research and Writing Method,” searching practices were conducted by library staff. Consequently, these practices improved students’ knowledge and skills in searching for relevant research.

[Key Words] university, practice, Media Information and Career, Thesis Writing